

去年の分をいまだ精算せずといへとも是より倍すべし
ロンドン 當今綿の賣買頗る盛なり

閏四月中頃の七日間

輸入 六萬五千苞 賣高 三萬七千苞

其次の七日間

輸入 七萬八千苞 賣高 五萬四千苞

茶、胡椒等も尚賣少く直段高下無し

葡萄酒より差置きとる瑪瑙の鎮臺ダボングエホルタ退位

セルジヨ、デスーサ是より代る

柳河春三 譯

中外新聞外篇卷之二十 慶應四年五月

○横濱布告翻訳

新泻兩港未定の趣を我にニストルよりヤ越したる
書付相添此段英國女王殿下の臣民等へ普く布告を
するのあり

千八百六十八年第六月廿五日 我五月 六日

於神奈川 英國女王殿下のコンシユル

ラチラン・イレツ左ル

書状を以て進み然り此度意大利、普魯士の両全權より條約

通り来十五日我五月以後廿六日以後の仮令危難の地ありとも勝手次第新泻於て貿易可致旨其国商人等へ相徇以松兩國コンレ
ル迄レ越レ以趣レ又レ以就てハ我國商人等も定て同松の布告有
レハ依レと可存レハハ共去第三月廿八日又我三月五日新泻ハ當時
山門政府と會津方との戦地又相成居レハハ付相越レ以依不相
成旨徇置以通り吃度相守心得違無之松早く徇達可レハハ
以上

千八百六十八年第六月廿五日

於横濱

ハルリーパークス

○官兵東廠山屯集の彰義隊を攻むる事

五月十四日夕方東廠山又屯集致一居ハ彰義隊より明十五
日官軍襲来の夙聞有之ハ有老人婦女子立退ハ松近辺町々
へ太鼓を打ち觸廻りハハ付人々騒立荷物等持運び大混雑
翌十五日朝五時過官軍分隊より諸方より押寄来り湯島天
神山并不忍の池を隔てハハ榊原の邸へ大砲相備松源并厂
鍋共料理の楼上へハ大砲引上げ山下辺戦ハ相始りハハ
直ハ発砲山内彰義隊よりハ山王山より大小砲打降ハハ遂ハ
大戦争と相成双方より打出ハハ破裂丸より一時ハ燃
上り山下の巷々ハ於て小合戦有之始ハ彰義隊の方大ハ勝
利の松子ハ相見へハハ八時頃官軍の大兵黒門前ハ寄来り

山内貫義隊の一手裏切の由より諸方の戦ひ一際劇々時又會と相記し旗押立にて裏手より援兵来り以拵子の処右の偽兵より忽ち発砲其内山門中堂諸坊より煙焰盛立昇り遂に山内山外の彰義隊皆崩立ち以て口々の官兵一度に攻入山王山に働居に彰義隊を狭撃鏖殺し以て由七時頃に至り全く戦ひ終る官家の山退去に其前日あり共いひ又當日午前ありとも云山退先を發輝と不相ふ尤敗兵を諸方へ分散一手を東橋へかくり以処固りの紀兵相支いて戦争有之にへども遂に切抜落行に由○其後山下辺に官軍の邏兵數帯刀の者を見掛けにへ有無の掛合ふ切捨

よい〜根津谷中辺落武者の穿鑿尤嚴重あり十六日十七日の兩日山内は貯へ有之米及び諸坊を勿論官様の以手道具并金銀の紋散らりの佛具迄下人へ投与或を踏壞し且又近日山内に残る所の建家を焼拂ふとの風聞有り諸説未定本文彰義隊と云ふ徳川家并諸藩の脱走人等屯集し其ものより決て徳川家の正兵より其頭の小田井藏太池田大隅守菅沼三五郎春日鏡太郎と称する者の由此騒動の當日徳川家執政より解兵の使として服部筑前守行向ひくれども遂に服せざるもの風聞有り實に遺憾と云べし

台徳公廟前ニかいて洪紙を敷其上ニ切服シ者一
人アリ既ニ其首を取去る故誰カ知スん
會の援兵と稱シて裏手より入ルるを全ク誰説テたりと云
裏切ル亦詳アリん此度兵火燒失の場所ハ公私雜報第十
五号ニ圖アリり詳アリ就て見ルべし
本文貫義隊ハ多ク諸藩の脱走人ニシテ彰義隊中の一分
隊アリ

○北地探索書寫

伊達陸奥守上杉彈正大弼南部美濃守丹羽左京大夫松平大
学頭阿部美作守相馬因幡守秋田万之助水野直次郎板倉甲

斐守藤井伊豆守岩城左京大夫田村右京大夫生駒大藏其外
三藩都合十七頭閏四月十八日會盟會津を援けハ事ニ一致
し只今迄官軍方ハ差出置ハ人数一旦引揚ハ事

但右諸侯近日白石城ニ於て合兵の上大舉進軍相成ハ由
閏四月十九日冬謀衆の由世良某勝見某福島ニ討取ハ
趣此儀極密ニ相成居ハ得共相違無之トシ相関中ハ

同月廿日白川城の戦争脱走方勝利シ醍醐様奥州本宮以
より装束を戎服ニ改ラれ白川ハ社為趣ハ途中危キ場合
屢有之漸ニて福島城ハ入リ暫時右の所ニ居ハ後川舟
トシ仙臺養賢堂ハ移相成ハトシ

九条様も當時養賢堂より逗由仙臺侯より山町等より取
扱有之尤薩長の人数も退散仙臺家より驚衛の由も相関中
の同月廿一日野村某福島より討由其外四人程討由
由より共駭と相かり不中
澤三位様羽及へ出張の処多分養賢堂へ引返し可相成
趣薩州大山某羽州より討より凡関有之
官軍先頃白川城を攻落し薩兵相守居り処閏四月廿日會兵
も取返されより
九条醍醐の山両御を仙臺城へ奉入置り積尤正邪分明も相
成り迄仙會兩藩へ山倚頼も成度との凡関

閏四月廿四日戦争會兵敗走同廿五日仙會脱兵大挙し
官軍薩長土大垣忍笠間館林勢と大戦争官軍敗北太田原へ
引揚げ損傷夥敷し
粟橋宿通行の節手負死人舟三艘も積川上より下り由同
宿役人の咄あり古河宿りも大垣怪我人多分滞留致し居り
仙藩千五百人程閏四月廿七日迄も白川へ繰込み會津より
七大隊の人数差出奥及諸藩悉く出兵進軍の凡関有之
此地列藩の議論もを討り旨を
朝廷へ申立益勤王より自ら官軍と稱し由の事
右大事件変革も付の取調として仙臺上杉兩家

の重臣速_ニ上京_シ、_レ由_レ此_ニ上_ニ如何_ニ可_ニ相成_ル我
閏四月廿七日白川白坂口_ニ官軍_ト會兵_ト戰爭_{有_レ之_レ}へ
ども勝敗未_レど相_{分_ル}らん
同廿九日四時頃今市より會津へ越_レ途_ニ中国境_ニ新道_トといふ
所_ニ於_テ官軍方_ニ二千余人_トと脱走_シ會藩_ノ人数_ト大戦争_{有_レ之_レ}
い_ハ処_ニ官軍方_ニ敗走_シの_レより
普魯士人_二名_一會津へ来_リ三兵_{傳習}器械_{製造}且_ニ金銀山_を用
き_ハい_ハ付_若松城_下威_ニ相成_ル由_レ小佐越_邊通用_ニ金銀_{多_ク}分_會
津_{出来}を_相用_ヒい_ハ右_{普魯士人}ハ_{本國}脱走_シい_ハ者_ノ
由_レ相唱_ルい_ハ共_實ハ_{其國內}命_ニ依_テあり_ト云

閏四月廿九日頃越後口官軍米山か_ソ會兵_并脱走_兵と戰
争_{其節}雲霧_瞑朦_々信州_ノ官軍方_{薩長}勢_を敵_兵と見違_ハ
横合_{より}砲擊_夫故_{官軍}敗走_シい_ハ鉢崎_迄引_ルい_ハ實_否未_レど
詳_ふらん

失題

海舟漁夫

蜻蜒不知_冬井蛙笑_蟄龍_下士昧_{大義}何_空苦心_胸寰宇_今咫尺
烟波_一萬里_滾翻駭_浪條_忽恣_行止_蔓衍_及東洋_{強弱}互_勃起
妖氛_橫中洲_骨肉_争小節_遠圖_誰所_副蒼生_被戰_血終_生鷓_蚌悔
不用_煩饒_古

○ 徳川民部太輔殿は用の倭有^レ之^ハ付 朝廷より帰朝可致
昔佛國は苗学先^ハ由沙汰相成^ル事

○ 篇中^ニ載^タる。上野戦争の事も差向探聴の説^ニ従^ヒ取敢^ズむ
報告^スも^レそのなきを追^テ委曲^ニ其実否を正^シ戦の始末を
猶次篇^ニ記^スべし



○ ロンドン・エンド・マイ子エキスプレスヤソノ新聞

より抄出

先頃より魯西亞諸邦^ニ於^テ驚^クべき石炭坑を数多發明せ
り就中或^シ一處の礦山を百五十年乃至二百年の間年々平
均高四万噸^{一トンを我ニ百}の石炭を出^スるに堪^ヘしと此國
千八百六十四年以來^{ドンの}山谷^ニ於^テ四十四の良坑を見
出^シ一萬二千三百四十九億四千七百三十七萬五千斤即ち
十八万億噸餘の石炭を掘出せり實^ニ魯國の礦物^ニ富^ムる

事を遂に我英国に勝つ処より我諸礦山を全く掘尽すの
後猶魯国にても出高衰えべしと二百年餘の後掘方引續
くふべし嗚呼何ぞ天公北地へ幸しく如此礦物を恵む事
の多きや

○
去る日本二月中佛国の兵卒一人備前侯の行列を横切りし
して即座に傷害せられし依て仏のミニストル其惨酷な
る處置を報ゆんと強論を尽せし故日本政府自ら力不足
ざるを知り餘羨なく其時の物頭役を刑せり
但此役名を我
口口子官に
當らる
者あり

則仏のミニストルを此醜酷せる兵卒の過よりしと本国の
大恥辱を受くる事を怒り其汚を雪ぐん事を只日本人の血
を以てせらるゝ如うべしと決着し刑場を兵庫の一寺院に設け
しめ各国公使館より立合を取り日本役人をし之を行は
しめしめり、因り其罪人座に臨み勇しく一言を吐ひて曰予を
決して罪あり、予を我國の法に従ひ、我國の譽を顕し、且予
の主人への勤を為せしあり、又曰く若し我国人佛国の都パ
リスに於て狙りし軍列を破りしありば仏の口口子ル必ら
び我れ為せし如き處置を其のへ加ふべき事疑ふし嗚呼
言終りて自ら刀を左腹へ突立右の方へ引廻りや否や其

友人の由後より、彼の首を打落を然る後一人有りて其首級を漆器へ盛り、各国檢使の夫々へ順々手渡し、日本役人も諸君皆満足ありや如何と得意の体にて一々問廻り、由あり是即日本兵庫よりの書翰と言越し、趣より外国にても至て珍らしき刑法あれ、爰に記出をらん、右の事を本篇第一号に載せ、今其詳ある事を横文中に得、故に茲に訳出し、参考に備ふ

○大坂近辺洪水の報告

去る四月中旬より、閏四月中旬まで連日強雨、同十五日入梅、又相成いて却て天氣七八日打續き廿日過より、又以雨天五

月九日十日兩日晴十一日より十五日迄晝夜少しの小止り、又大雨頻りに降通し、大坂近郷も不及り上方筋一圓大出水相成り事

十三日申刻泉州堺の大和橋より二三町計り川上より、瓜野村南の方堤幅四十間餘も切所出来、其水勢尤劇敷激流渦を巻き、逆波高く起りて成の方へ押流し、其恐ろしき警あり、又このも、又其辺忽ち黒海の様をあり、中は諸大和橋北詰安立町中程迄四五町の石の家土蔵不残流失、溺死人尤夥敷、同所小難波屋松も不及り、住吉より北の方迄深さ五六尺の出水、舟々船あり、往來相成兼り、

淀川筋又於ても淀の小橋落いて大坂天満橋へ流かりり十
二日曉七ツ時橋の中央三十間餘流失尤天神橋難波橋を無
難より然と共十三日より往來道は相成り以備又川上へ平
田より処切所出来中島より江口三番新家新庄白鳥崇禪寺
馬場其外村より一圓押水屋根より高く水嵩相成り以
中津川よりても横せきより処切所出来三番村ちかそ村海老
江村海老島浦江其外村より北野辺迄一圓大洪水
東の方を徳菴堤の辺切所出来隅の堂より東山際を不及り
大坂より東へ在村より一圓大出水より恰も海の如く又水
度い

西下福島野田村傳法等堤所より切込土砂押流り以
大坂の市中より北の新地三丁目より西の方へ至り水の深さ
一尺五六寸下原より床の上二尺程りも相成り以
右の外所より堤切所等有之り以共未ど子細り相ふり不し弱
死人怪我人お数多有之趣り以共是亦取調行届不し以八
九十年未及むより大洪水中り以て筆紙に難く猶近国洪
水の依り追り岡糺の上為り知可し上り云り

六月朔日

飛脚問屋 某

○上野戦争雜説

臥竜隊の隊長を武田騰のり會藩の由と云者より兵士の皆徳川氏の

脱籍士あり由内歩兵尤多く會藩も亦四五名ありと隊法
西洋一時間より候を出入り事凡そ三度若し敵人を捕獲され
ば毎之を責て曰く汝藩徳川氏に對し嘗て発砲せし事は
如何ありやと之らりと云者を直に断頭し之ありと云者
をも謝しけ放返せし由此隊先は八王子に赴き其後江戸に
帰り中野の宝仙寺に屯集し五月八日官軍東台を襲撃せん
とを聞き即夜大風雨を冒し援け來り根岸の藤寺を
本營とあり所より隱兵を置き坂本新門より天王寺の後
至迄山北一圓を防守せりと伏兵多く農夫の装をあり鐵
斧を執りて路傍に構り而して銃砲を籬間草際におき敵

來まば忽ち應ぜし由あり其兵常々大言して曰く敵を
一人も我守地に入らざれば若し入る者あれば千万人
と雖も悉く之を殲むべしと云く此隊ハ實に東台中第一の
強兵ありしと云へり

○
黒門破まじり時砲声弥烈敷小銃乱発山内の兵敗して退く
時一傷卒銃を杖き血を啜て至る或人相遇ふて問て曰く
黒門の戦状如何答て曰残念あり我黒門口破れり又曰く
吉祥閣下は屯せり浩氣隊の兵裏切らん卒尔不可信して敵
に應じ故に破れりとい走りて本坊の前に至り遙に臨む

敗卒群集門を開き日の丸の旗一本を中央に押立東照宮と
記し、旗二本を左右に捧げ大に関声を發し敗將各白刃
を揮ひ進め、と令し、然るに官軍は既に吉祥閣の辺
に進み砲銃乱發彈丸雨の如しと云く

○五月十日頃奥州よりの便に當時白川城官軍の手を渡り薩長
の精兵二三百人之を守り

○五月中旬川柳点

龍王が落ちて崩れ象棋隊

負成